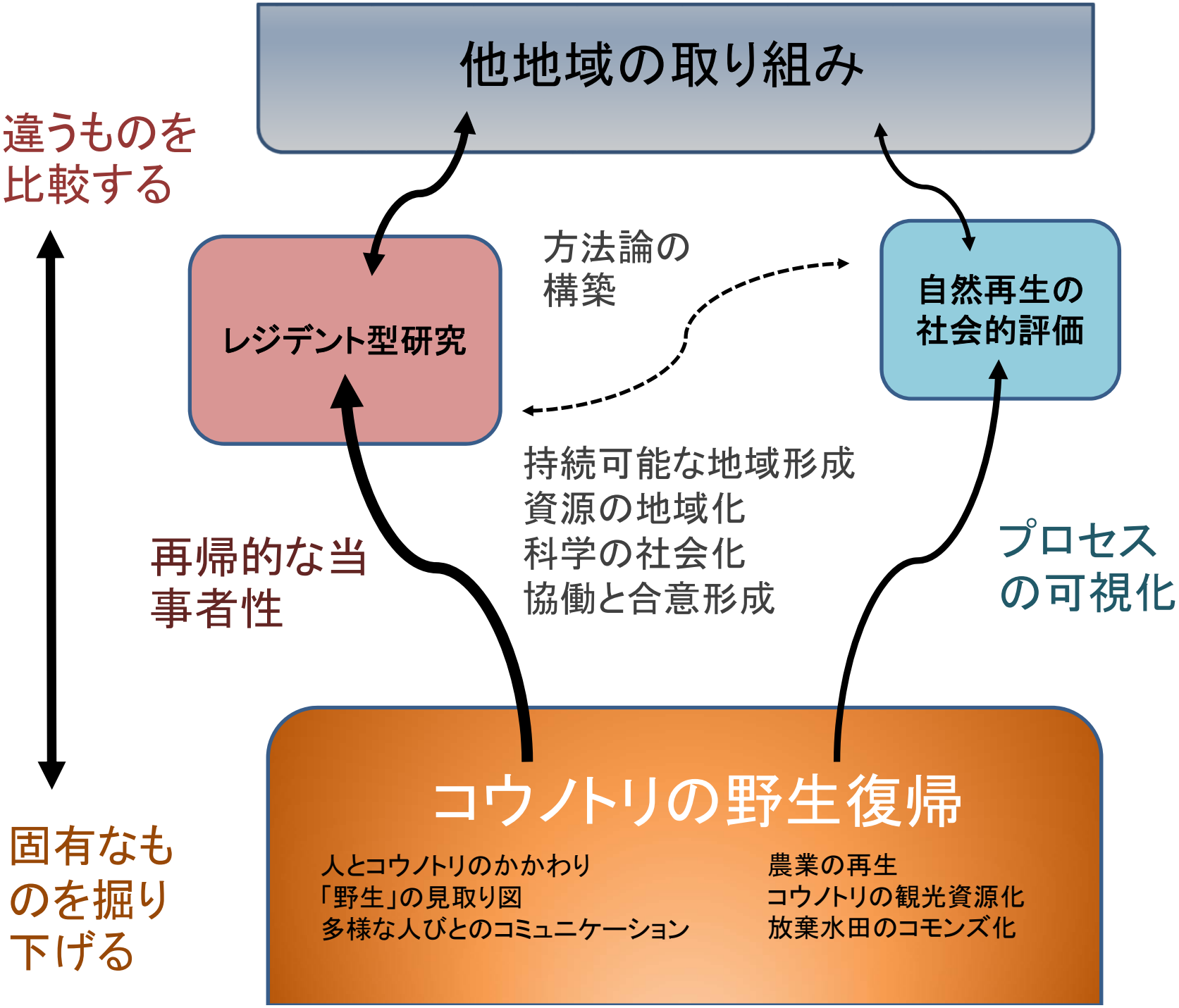
宮内科研で何をするか？

―社会的評価ツールの開発という実践―

2016/07/23

総合地球環境学研究所
菊地 直樹


他地域の取り組み
違うものを
比較する
レジデント型研究
方法論の
構築
自然再生の
社会的評価
持続可能な地域形成
資源の地域化
科学の社会化
協働と合意形成
再帰的な当
事者性
プロセス
の可視化
固有なも
のを掘り
下げる
コウノトリの野生復帰
人とコウノトリのかかわり
「野生」の見取り図
多様な人びとのコミュニケーション
農業の再生
コウノトリの観光資源化
放棄水田のコモンズ化

問いかけたいこと

- ある地域の問題を研究対象として分析するというよりも、何らかの解決に向けた立ち位置にいることにより見えてくる社会的現実を研究対象にもしていく！
- コウノトリ、シマフクロウ、ジオパーク、中海

問いかけの背景

- コウノトリの野生復帰は「社会的な問題」（池田啓）
- だからこそ、環境社会学への期待は大きい
- しかし、内気な私は、なかなか適応できなかった・・・
- コウノトリに関するさまざまな研究・・・
- 現場での対応、私に要請があったことに向きあうなかで、結果として論文や本などを書いてきた。
- 行き当たりばったりの研究者人生
- しかし、そこから研究の当事者性を考えることにつながった
- 現在、やや当事者性を欠いたポジションから、レジデント型研究の課題と可能性、今後の展望を研究。加えて、自然再生の社会的評価にも取り組む。

自然再生の現状

- 各地の事例で共通する課題は、自然再生と地域再生の統合という「理念」は共有されていても、複数の価値の実現を目指した「合意形成」は困難であること
- 自然と社会の不確実性→正解が出せない
- 順応的ガバナンス

不確実性の中のハンドリング

- 二つの不確実性を前提にするにしても、なんでもありではないだろう
- 多様な主体による順応的プロセスのデザイン
- 順応的プロセスに自己評価を組み込む
- 絶えず変化する目標、手法、担い手などを段階段階で自己評価する
- 不確実性という荒海の航海を手助けする社会的評価ツールの開発へ！

社会的評価の必要性

- 人と自然のかかわりの再生を目指す自然再生は、地域社会にさまざまな影響を及ぼす総合的な取り組みである。議論しなければならないのは、自然再生を軸に自然とかかわる営みがどのように創られ、そこに暮らすことの価値がいかに創出されたかといった社会的な変化なのではないか。自然再生の社会的側面の評価が必要である。

なぜツールなのか？

<u>現場で使えることを意識</u>

①評価手段であること

②関係者自らがこれから地域で取り組むべきことを発見する手段であること

③現場で起きている多様な活動を「可視化」し、関係者で共有できること

なぜか中海に通うことに！

- 出会ってしまった中海
- 環境省の私的研究会（岡野研究会）
- コウノトリの野生復帰と自然再生の社会的評価について話題提供
- 後日、自然再生の担当者から連絡
- ぜひ、中海の自然再生を評価してほしい！
- 認定NPOが事務局を担う珍しい事例らしい
- 荷が重いと躊躇したが中海に通うことに！

提供：認定NPO自然再生センター

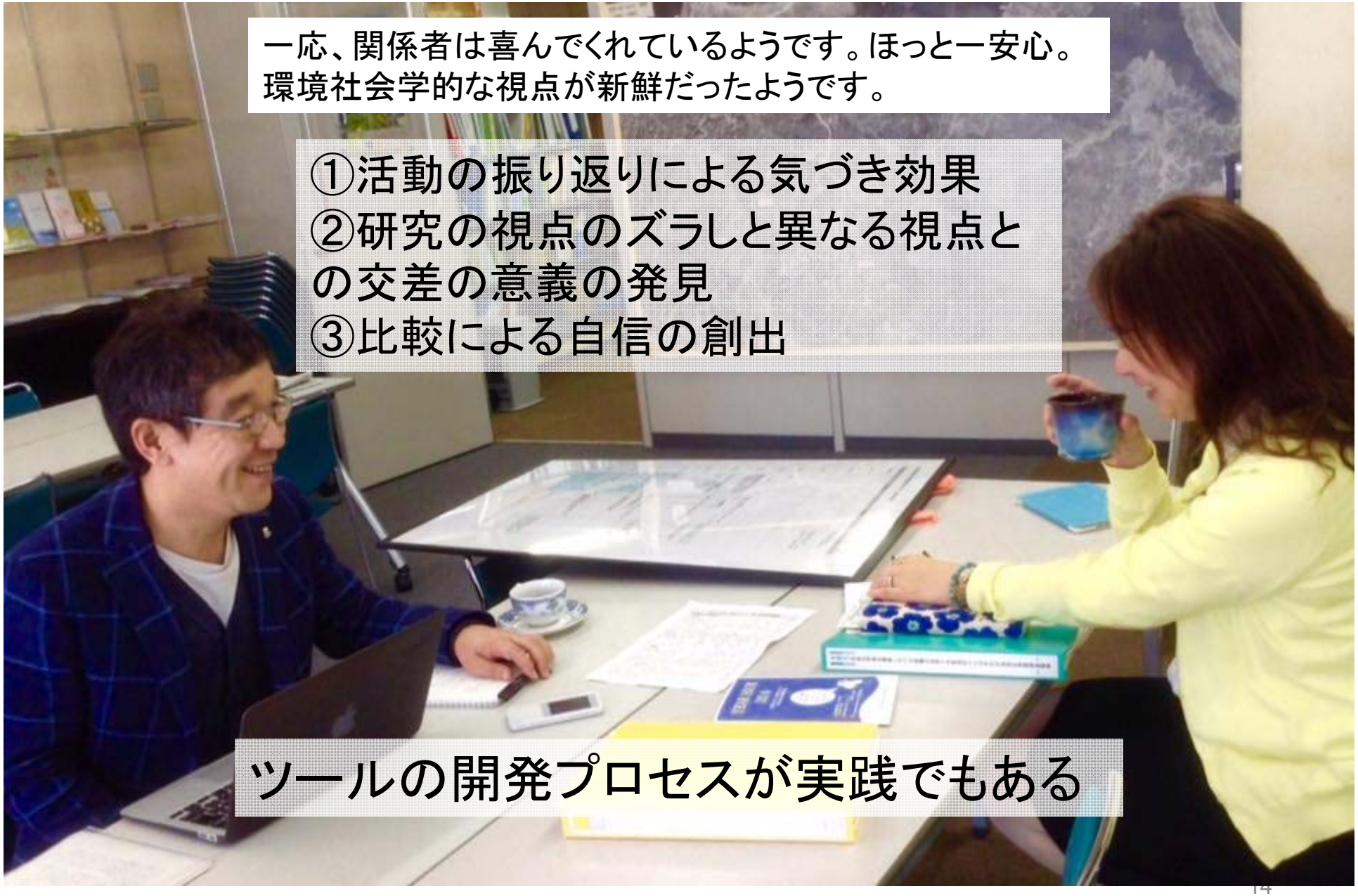
提供：認定NPO自然再生センター

社会的評価シート（Ver.2）

	評価項目	評価項目の内容	具体的な内容
問題		何が課題であるかを集合的に認識するプロセス	
人	かかわっている人たち	「自然再生」を目的に行動する主体	
	人たちのつながり	アクターたちのつながりの状況	
	集まる場	多様な主体が情報やサービスを交換する、主に空間的な場	
	意思決定の仕組み	目標を選択し、利用可能な手段群のなかから特定の手段を選択するための仕組み	
技術と行動	自然再生を行うためのノウハウ（社会技術）	自然再生を社会的な対象として扱えるように変換する技術	
	具体的な行動	自然再生に関わる具体的な行動	
	自然再生の技術	自然に介入する技術（社会的ハンドリング可能性）	
知識と評価	知識	ある事象に関する認識・理解の内容及び方法	
	評価	主に外部からの承認、アクターが感じている楽しさ・充実感	

中海の自然再生（2007-2014）

	評価項目	2007-2008	2009-2010	2011-2012	2013-2014
問題		研究フィールドとしての魅力	窪地問題・水質問題 住民とのつながりの創出	「泳げる海」→住民を巻き込めるビジョン形成 何のためか→包括的視点	活動の自立化・持続化 共感の創出→アカガイのシンボル化、住民の参加促進
人	かかわっている人たち	島根大学の研究者	漁協、米子高専	中尾さん、熊谷先生（米子高専）	企業、行政、NPO、住民
	人のつながり	島根大学ネットワーク 住民会議 経済界	行政側との協定 企業、NPOとのネットワーク	小学校 米子側との交流	企業とのネットワーク
	集まる場	白潟サロン	中海会議（2010）	エコショップ 米子と疎遠	
	意思決定の仕組み				
技術と行動	自然再生を行うためのノウハウ）	勉強会 協議会設立 全体構想の策定	事務局体制の強化（2009） 環境学習重視 信頼構築と協力的参加 ネットでアイデアと実施者を公募	事務局運営（間接経費） 助成金の獲得 小学校での環境学習	認定NPO（2013） 助成金からの脱却 専門家（会計士、労務士）の雇用
	具体的な行動	調査、勉強会 活動の試行錯誤	活動の具体化 窪地の埋め戻し アマモの保全・再生事業	窪地の埋め戻し 生物多様性保全・環境活動 夕暮れコンサート	組織強化
	自然再生の技術		ハイビーズ（中国電力）		
知識と評価	知識	水質、生態系	アマモの保全・再生	都市計画との融合	
	評価	外部評価があまりなし 積極的発信	社会的実績の蓄積 行政側に認知	[illegible]	社会的評価と責任

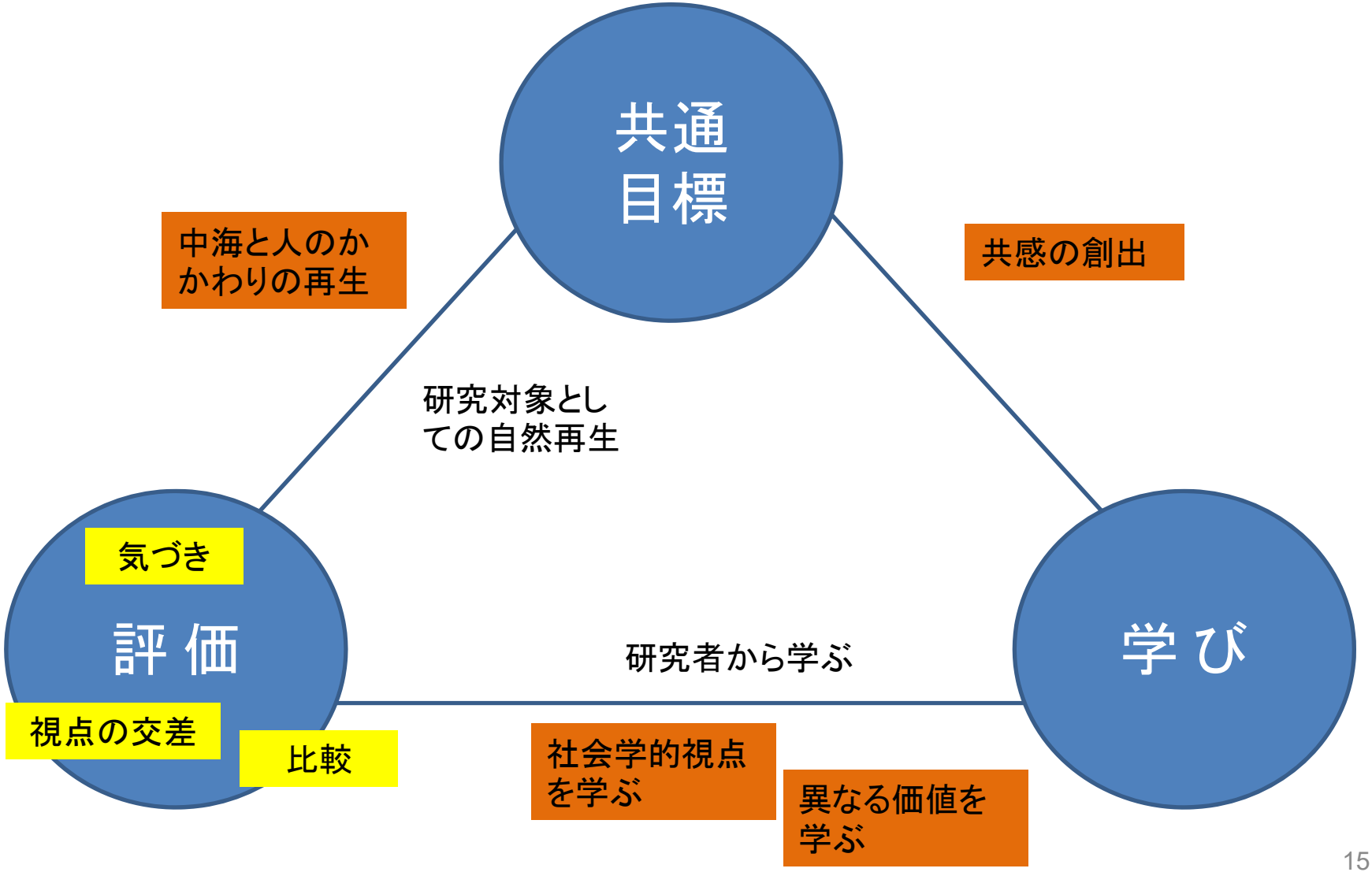


一応、関係者は喜んでくれているようです。ほっと一安心。
環境社会学的な視点が新鮮だったようです。

①活動の振り返りによる気づき効果
②研究の視点のズラしと異なる視点との交差の意義の発見
③比較による自信の創出

ツールの開発プロセスが実践でもある

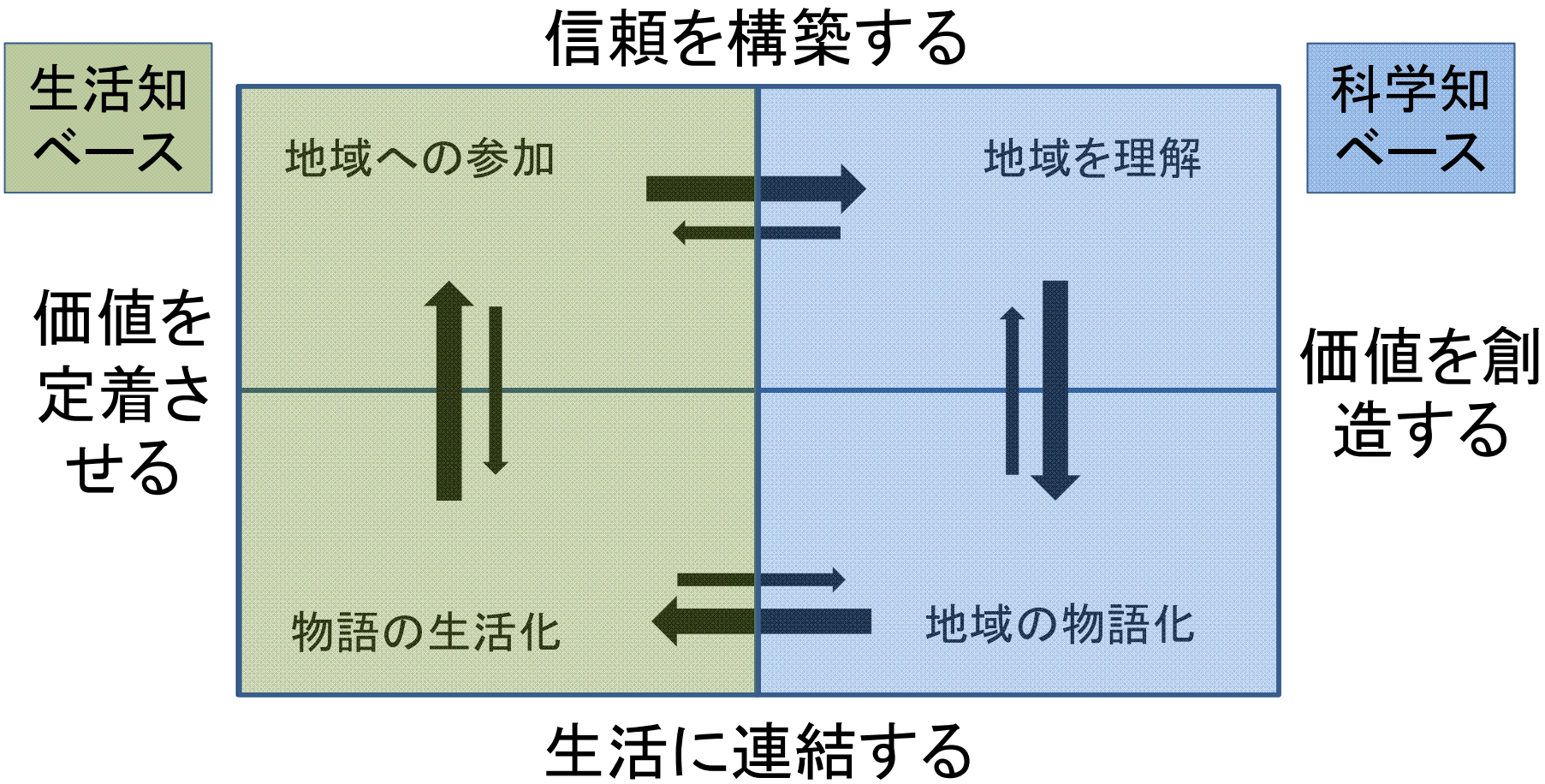
プロセスのハンドリング



宮内科研で何をしたいのか！

- さまざまな現場で社会的評価ツールを使ってみる。その使い勝手、妥当性、現場での意義などを検証し、より使えるツールにしたい
- その他の評価ツールも開発してみる
- 中間支援組織、あるいはレジデント型研究者、双方向トランスレーターの多面的役割を明らかにし、政策提言？につなげる

重層的・循環的なレジデント型研究者の活動



菊地直樹（2016）「持続可能な地域づくりとレジデント型研究者
ーその多面的役割に関する試論的考察」

機能

知識の性質
- 科学的知識
- 在来知
- 知識と人格の不可分性

トランスレーション
- 物語化
- 生活化
  - 信頼の構築

方法

研究方法
- 同化/異化
  - 共感
  - 理解
- 研究と活動の循環性
- 複数の立場の往復作業

条件

経験
- 地域住民と通底する経験
- 地域住民と通底しない経験
- 再帰的な当事者性
  - 身体・空間的配置
  - 重層的空間レイヤー

関係性
- 地域内関係
- 立場の複数性
- 異なる目的の相互受容
  - 漸近線的接近
  - 身体的コミュニケーション
  - 概念的コミュニケーション

		活動名	テーマ	組織	地域	聞き取り回数
第1章	レジデント型研究者という生き方（菊地直樹）					
第2章	中川元さん	知床博物館・知床財団	地域認証	博物館	北海道	1回
第3章	星（富田）昇さん	EIMY湯本	人材育成	地域NPO	東北	1回
第4章	伊藤浩二さん	能登里山里海マイスター養成講座	人材育成	大学	北陸	2回
第5章	岡野隆宏さん	環境省レンジャー		行政		3回
第6章	西野ひかるさん	アマモサポーターズ	自然共生	地域NPO	北陸	2回
第7章	白川勝信さん	芸北 高原の自然館	自然共生	博物館	中国	2回
第8章	神田優さん	黒潮実感センター	自然共生	地域NPO	四国	0回
第9章	中山清美さん	奄美遺産	地域認証	博物館	九州	2回
第10章	柳田一平さん	NPO INO	資源管理	地域NPO	沖縄	2回
第11章	上村真仁さん	WWFサンゴ村・夏花	地域づくり	広域NPO	沖縄	3回
第12章	まとめ（菊地直樹）					

・変動帯の日本→どこにでもあるｼﾞｵ遺産
・直感的ではないので説明が必要
・でも意外に生活に関わっている
・知れば親しみ&重要性（特に防災）
・知られていない分、先入観なく見られる
・研究者側も知ってもらいたく最初から低姿勢

科学的価値（地域遺産）

・地域の宝を皆で見つけて自慢しあうというのは着手しやすい(地方分権時代)
・協議会方式、認定制度等既存の日本の行政のスキームにのせやすい

理由をつくるツール（行政計画のｼﾅﾘｵ等）

・ｽﾃｰｸﾎﾙﾀﾞｰそれぞれの活動のため、ｼﾞｵ遺産をどう活かしていくかの知恵を絞る
・特にｼﾞｵストーリー作りに知恵絞る
・ｼﾞｵ＝大地なのでお互いの活動を結びつけやすい

考えるツール（ｼﾞｵストーリー作り）

ジオパーク
・保全
・教育
・活用

認証制度（権威/ﾁｪｯｸ）

・2つの機能：
　1）科学的価値の品質保証
　2）活動の評価・外部助言
　（繰り返しby 再認定審査）
・社会に対するラベリング
　ブランドの創出
・一足飛びに世界GPでなく、日本GPあるので敷居低い
・“緩い”認証制度なので都合よく使える。バランス取れる

参加を促す（関係を作る）ツール

・ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸを受ける。For,
　・評価基準も時間とともに変わる
　・自らの活動から常に学び続け、適応し、常に変わり続ける進化体
・様々なﾌﾟﾚｰﾔｰのinteractionこそｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝでは必須
・その意味でばらばらにやっていてはダメ：持続性や融合の問題で

いかなる活動もOK（緩い関係性）

・ｽﾃｰｸﾎﾙﾀﾞｰの様々な思惑
　住民：楽しみ　（ﾂｱｰ、老後）
　自治体：地域振興・教育
　研究者：ｱｳﾄﾘｰﾁ
　NPO：保全……
　企業：ビジネス
・違っていい。全体で調和すれば。楽器と交響曲の関係
・ジオに関われば良い

ジオパークWSによる成果